

これらの遺構をご覧いただくために、現地説明会を10月6日に開催しました。新聞・テレビで報道されたこともあって、参加者約600人と盛況でした。

調査終了後、現地は水田に戻っています。



石神遺跡の全景と調査区（北から）

奥山廃寺の調査（飛鳥藤原第114-8次）

明日香村にある奥山廃寺の東門改修にともなう事前調査です。東西3.5m×南北2mという小さな調査区ですが、南北に並ぶ金堂と塔の中間部分の東側にあたり、これまでの調査成果から、奈良時代に施された瓦敷きの検出が期待されました。

瓦片と礫がつまった、まさに瓦礫というにふさわしい層を掘り下げると、瓦敷きが顔を出しました。意識的に凸面を上に向けて敷いた比較的大きな平瓦や、ばらまいたと思われる小片があり、その中には長さ38cm、幅25cmをはかる鴟尾の破片もあります。奥山廃寺での鴟尾の出土は初めてです。

この瓦敷きの下層には、7世紀前半の瓦で整地した瓦層があり、瓦敷きを施す前に、比較的大規模な伽藍内建物の改作があったことがうかがえます。

わずかな面積の調査でしたが、実りの秋にふさわしい成果をあげることができました。



奥山廃寺の調査区と塔跡に建つ十三重石塔

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

文化財関係研修の実施

発掘技術者研修 「文化財写真課程」

8月21日より9月21日の日程で、文化財写真課程の研修をおこないました。

今回から、平城宮跡発掘調査部に新設された「写真資料調査室」が担当で、本年の参加者は例年よりすこし少な目の10名で、「少数精鋭」の研修でした。

本研修の内容は、文化財調査に必要不可欠な「写真記録」に対する基礎知識や、技術の修得を目的とした研修で、その内容は非常に多岐にわたります。まず、記録材料である写真感材の基礎知識から撮影、そして撮影された写真の保存から、その活用である印刷技術の基礎知識まで及び、1カ月という長期間にもかかわらず、例年やや消化不良の感が否めない研修です。

本年の参加者は少人数が幸いして参加者各自が指導者と十分なコミュニケーションを取ることができ、理解度は高かったと思われます。

前半の座学ではいわゆる「写真専門学校」で教えるような専門知識を講習するため、写真の専門教育を初めて受ける研修生はついていくのに精一杯の様子がありありと見え、理解する段階にはなかなか達しないようです。

後半には実習があり、参加者は撮影から現像・焼き付け、図版割付までを2名ないし3名のグループでおこなっています。図版割付の時、参加者が口々に声を上げます。「縦画面が必要な図版で縦画面の写真がない」「露出不良でコントラストのしっかりした写真がない」「フレーミングが悪くてトリミングができない」「ピントが合っていない」

上流（撮影）で流した汚水は下流（印刷）で取り除くことはできない。つまり「よい撮影をすることがすべてに優先する」という文化財写真の基本を実感することになります。

講師陣には、我が調査室のスタッフをはじめ、写真業界の第一線で活躍している外部講師や、印刷業界の最前線に行く印刷会社の技術者をそろえています。講師陣すべてが「埋蔵文化財写真は撮影された写真そのものが文化財であり、豊富な情報量とそれを保存する環境がなければ文化財写真とはいえない」という共通の考え方に基づいて講義をおこなっ